

「フィネガンズ・ウェイク」といつまでも

浜田 龍夫

長年住んだ千葉県柏市から二年半前に高知市に移住し、かつて父が住んでいた二葉町の古屋を直して二年住み、半年前に高知市在住の一級建築士の大井さんに頼んで入明町に新居を建てた。

土地は家内が母親からもらったもので約百坪あり、家は柏の自宅を売却した分で建てた。家は二階にギャラリーを作ろうということで設計した。そして外壁に大きくALPという文字を入れた。

これは僕のジョイス出版の会社アピコ・リテラリー・プレスの頭文字でもあれば、「フィネガンズ・ウェイク」の HCFE の愛妻 ALP でもある。

もともと僕は農水省の筑波で畜産研究に定年まで従事してきたが、役人的に地位のあがることは望まず、論文を書くことにこだわってきたが、五十歳代になってもともと好きな文学志向にほだされ、当時柏市にきていたアメリカ人の口

ローレルさんから原文で小説を読むということ個人レッスンを受けた。

そして彼女がハワイ大学でフリッツ・セン教授から教わったジョイスの「ユリシーズ」を読み終えた。このパターンは僕が高校時代を通してアメリカから帰国した老人からミルの「自由論」や大学における詩と絵画の講義録を読んだことと同じで、僕の英語の力は 外国人の前で原書を読むことで培われたと思う。そしてローレルさんと一緒にALPからジョイスの「フィンガンズ・ウエイク」の研究誌を十年出し続けたが、最後はこの小説を自分でも読まないといけなくなり、この難事業にとりくんだ。

この小説は英米人の学生に読ませてもほとんど意味をとれないほどで、僕も当時出版された柳瀬氏の訳を見ても、結局何を書いているか部分的にしかわからなかった。こういう時は一番わかりやすいところから攻撃するのがよいと思ひ、ちやうど最後のALPの告白を英語でやさしく書き直した論文を見つけ、そこから原書をすべて日本語に翻訳することを始めた。

この時、この小説の最後にALPが絶望してリフィ川に身を投げて死んでいく場面があり、その英語の詩的な美しさに圧倒された。それがなかったら僕はこれほ

どこの小説に深入りしなかったろうと思う。

高知の二葉町での翻訳作業は後から思うと意外と速く進んだ。

このときは Fweet という全文注釈のソフトがインターネットで利用できたことで、それがなければ不可能だったと思う。昨年全部の翻訳を出版したが、自分でもそれを通して理解可能かどうか自信がなかった。それで今年の六月に原文の約三分の一を選んだバージェスの短縮版の翻訳を解説入りでつくり、「フィネガンズ・ウエイク読解」として出版した。

また自分で原文中のもっとも面白く詩的などころを翻訳した「フィネガンズ・ウエイクの詩的短縮版（仮名）」も作ろうと思っている。このように僕はやっとな小説を自分なりに理解し批評できる段階にきており、その基礎は僕のパソコンに全部の翻訳原稿を入れてあるせいである。

さいわいどこにいてもジョイスは有名で、この小説の名前も知られており、僕もこれからの老境の慰みとしてこの小説にかかわっていけることを幸せに思う。